保育園児の箱庭制作に見る人間の創作行為の起源

RESEARCH ON HUMAN INVENTIVENESS ORIGINS THROUGH KINDERGARTEN CHILDREN'S SANDPLAY WORKS

坂戸 省三*, 河内 あゆ**, 東野 アドリアナ***
Shozo SAKATO, Ayu KAWAUCHI and Adriana HIGASHINO

This study utilizes sandplay experiments as a means to analyze the development of 4 and 5 year old kindergarten children's creative spatial organization of toys. The children were asked to arrange several toys in a box filled with sand, and they were told to play in the sand box and with the toys freely. The researchers were able to identify and classify the children's developmental steps in the creation and recognition of their spatial organization of the toys. These steps ranged from the simple displacement of the toys in the box to more complex arrangements where meaningful spatial relationships between the toys were established.

Keywords: sandplay works, development of spatial organization, sex differences, archetypal spatial images

箱庭作品, 空間構成の発達, 男女の違い, 原型的空間イメージ

1. はじめに

本稿は保育園の4歳児組および5歳児組の園児に箱庭を作ってもらい、それを観察することで、園児の箱庭作品にはどのような内容や形式等が現れるか、また創作行為がどのような要素でできているか、それらがどのように発達していくかを考察したものである。本稿で考察対象としたのは4歳児組（4歳から5歳）の男子10名、女子17名と5歳児組（5歳から6歳）の男子15名、女子9名の箱庭作品である^{注1)}。使用した箱庭セットは通常の箱庭療法で用いられているもの（砂を入れた57cm×72cm×7cmの箱と、人、動物、木、花、乗り物、家具、建築物、橋、柵、兵器、積み木、その他の多様な玩具類）である。本稿では作品を、発達の視点から、「羅列・混沌」の段階、玩具が全体的に意味をもって配置された「構造化」の段階、そして両者の中間の様相の「部分的構造化」の段階などに大きく分類し、考察を進める。

1-1. 箱庭研究の意義

人間は常に何らかの世界像を現実世界に投げかけ、その結果をフィードバックさせ、さらに世界像を意識的、無意識的に構築しつつ存在している。そうした世界像構築作用の早い現れが、幼い子供たちの積み木遊びやままごとなどの想像的情景を創り出す、玩具世界での遊びである。幼い子供の玩具世界での遊びは、人間の想像力、創造的活動の個体発生的起源であり、人間が自分のいる世界を把握

し、経験を整理していく方式の原型をなす。この遊びに関してエリクソンは「進化に根拠をもち、幼児期の想像力あふれる玩具世界のなかで発達してきた一つの特殊な人間的能力。つまり一つの限定された領域のなかで特殊な象徴的意味を担った物体を用いて想像的情景を表現する能力¹⁾」という言い方をしている。箱庭療法はこうした人間の子供に自然に現れてくる遊びをそのままちいしている。つまり箱庭制作は人間の世界把握の普遍的方式を反映しているゆえに、そこには作者がどのように世界を捉えているかがおのずと現れているのである。また箱庭療法の道具立ては、臨床上の必要性から、作者の心にあるイメージが可能な限り自由に表現されるものとして工夫されてきたことも、こうした傾向をより強めている。

1-2. これまでの箱庭研究の概要と本稿の位置づけ

箱庭には作者の個人的な内面を反映したことがらの他、作者が属する文化圏の特徴、さらには生物学的なヒトとして共通する特徴が現れる。生物学的基盤に由来する男女の特徴などは基本的でごく当たり前のものとしてたいていの作品に現れている。

既発表論文ii（文末既発表論文欄参照）で幼稚園児から大学生までの男女約300名の箱庭作品（岡田天理資料^{注2)}）を分析したが、作者が自由につくるにも関わらず、男女ごと、発達段階ごとに驚くほど明瞭な共通性が現れている。そしてそれら共通の特徴やテーマは、各発達段階の男女が一般的に世界・空間をどのように把握して

* 明石工業高等専門学校建築学科 教授・博士(工学)

** お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科ライフサイエンス専攻大学院生

*** 明石工業高等専門学校建築学科 准教授・博士(工学)

Prof., Dept. of Architecture, National Institute of Technology, Akashi College, Japan, Dr.Eng.
Grad. Stud., Graduate School of Humanity and Science, Ochanomizu Univ.
Assoc. Prof., Dept. of Architecture, National Institute of Technology, Akashi College, Japan, Dr.Eng.

いるか、またどのような心理・社会的な空間イメージの中で暮らしているかを、具体的なかたちをとおして象徴的に表していた。

箱庭に現れる一般的特徴についてまず男子について見ていくと、移動・侵入的^{注3)}（幼稚園児の乗り物の多用、小学3年の戦いのイメージにおける戦闘車両、小学6年の野生動物原野の動物たち、中学2年の街のイメージでの通過交通、高校生の遍歴的、回遊的イメージなど）、外部的（箱の枠を超えて空間的に広がっているイメージ）、多元的（いくつかの領域が半ば独立的、半ば連続的に広がっているイメージ）といった特徴が多数の作品に現れる。写真1は、郊外の風景のなかを1台の車が走っていくという男子高校生の作品で、移動・侵入的、外部的、多元的な典型的作例である。既発表論文viiでこうした形式を「多元性の空間イメージ」と呼ぶことにした。

女子の作品ではどの年齢でも人類共通に「女性的一元性の空間イメージ」と名づけた形式が大量に現れる（既発表論文ix）。それは、住人的（人や動物が楽しげに暮らしている様子など）、内部的（箱庭の枠の中で世界が完結しているイメージ）、内包的（全体あるいは主要な部分が囲われている—ただし内包性・囲いが現れない場合もある）、そして一元的（全体として一つの空間が中心的な位置をしめる）という特徴をもつ。写真2は人々や動物たちが楽しげに暮らしている村のイメージで、その典型例である。なお女性的一元性の空間と分類した作品には、写真2のような全体をその空間が占めるものばかりではなく、女性的一元性の空間と周囲の外部空間という構成の作品も多い。その他、20代前半を中心とした若い女性では「二つの世界」と呼び慣わされる、川などで全体が二つの領域に分かれたイメージが世界共通に頻繁に出現する（既発表論文ii、ix）。

箱庭にはテーマを超えて上記の形式が現れる。例えば、男子では、動物原野であろうが、町や郊外の風景であろうが、多元性の空間イメージの構成をとるものが多く、女子では室内であろうが、庭園や公園、あるいは村や町であろうが、女性的一元性の空間イメージの構成をとるものが非常に多い。既発表論文vで考察したように、これらの基本的な空間イメージは生物学的起源をもつものである。

文化的差異の問題に関しては、多元性の空間イメージは、日本の建築や庭園に見られる多焦点的、非対称的で水平的に広がった空間と重なるものであり、一方、ヨーロッパをはじめ大陸の文化圏に属する男子の箱庭作品（および建築や庭園）には中心化された空間、中心を通る垂直軸、対称性などの特徴をもつ空間イメージ（「男性的一元性の空間イメージ」と名づけた）が多く見られる（既発表論文vi、vii、x）。このイメージは求心的形式と遠心的形式に分けることができる（図1）。多元的なものが中心に集中するイメージ（求心的形式）と、中心にあるものが多元的なものをまとめ上げ、支配するイメージ（遠心的形式）である。大陸文化圏の建築によく見られるのは遠心的形式であるが、どちらも内に強い攻撃性を秘めたイメージである。

日本においても、岡田天理資料の小学3年生男子群で、写真3のような戦車などによる戦いのイメージとして、中心の一点あるいは軸線に集中する対決的形式の男性的一元性の空間イメージ（求心的形式）が多量に出現する。日本人男子では、母性的環境から外部世界に打って出ていく時期である小学3年の年齢で、戦いのイメージとして求心的男性的一元性のイメージが多く現れるわけである。その他に人生の転換期を迎えるときなど、自ずと無意識裏に攻撃性が高まっている状態で一時的に現れて来るが、それ以外の日常的な状態においては多元性のイメージが多数を占める（既発表論文ii、iii、vi、vii、viii）。なお攻撃性が男子のようなかたちでは表立っていない女子においては世界で共通に女性的一元性の空間イメージが多数現れる（既発表論文ix）。以上のように箱庭作品には一定の空間的形式をもついくつかの普遍的、基本的な空間イメージが存在する。

今回、園児の箱庭作品では、4歳児組では羅列的あるいは混沌とした傾向がより強く見られ、一方5歳児組では全体的に意味のある玩具配列の箱庭作品（「構造化」された作品と名づける）が4歳児組より多く見られた。本稿では、箱庭作品に現れる特徴や形式、創作行為自体の発達の展開を記述していく。また構造化された作品のほとんどは、男子では上記の「多元性の空間イメージ」、女子では「女性的一元性の空間イメージ」という形式をとっているのを見ていくが、それがどのような意味をもつか等々を考察する。

2. 園児作品の分類

園児には玩具を使って何かを作るなり、遊ぶなり好きなようにしてもらった。過半は中身が徐々に積み上がっていき、最終的な形ができあがるものだが、一方で次々と場面が変わり変転していくものがあつた。またなかには何もせずに帰る者なども少数いた。それで説明としては「徐々に積み上がり最終的な形ができあがるもの」に関する分類から始めるのがわかりやすいので、それらから説明することにする。表1（3ページ後に提示）では園児の箱庭制作において顕著に目に付いたことがらを取り上げ、それらが現れた状況を示す。表の項1～4は心理・社会的発達に関するもの、項5～14は作り方などに関するもの、項15～20は男女差に関するものである。

2-1. 原初的段階

羅列：玩具相互の関係をほとんど考慮せず、同じようなペースで玩具を次々と並べていくもの。4歳児組男子1例（10%）、同女子4例（24%）、5歳児組男子2例（13%）、同女子3例（33%）。

写真4は4歳児組女子事例⑦（以下、女4⑦と表記。なお同じ箱庭で制作過程順に写真を複数表示する場合は-1、-2というように番号をつける。事例番号は表1に示したもの）は雑然と置かれた羅列の例である。雑然としているが、全く秩序がないわけではなく、玩具の種類は動物に限定するというまとまりがある（カテゴリー的認識）。写真5女4⑧では、動物が左下から順に並べられる。この2例では

写真1 多元性の空間 高校生

写真2 女性的一元性 小学3年

写真3 男性的一元性(求心的)小学3年

図1 男性的一元性

後半動物を砂に埋めたり、砂をかけたりする遊びがなされる。最終的には前者では多くが砂に埋められ、後者では砂と一緒にかき混ぜられておしまいになった。両例とも左下から置き始められている。

写真6男4⑤では、まず空いたところに置いていき、後のほうでは「詰め込むためにすでに置いてあるものを少しずらして」置くといった操作（表1、項6、他をずらす）が入っているが、作り始めから終了まで変更もなく置きつづける場合も多い（項5、変更なし）。

羅列の配置パターンとしては、写真4のように雑然と並べるものの他、列状に並べるもの（写真5）、正面向き、奥向き、右向きなど一方向を向いているもの（写真7男5⑧）、箱の枠と平行に縦横に置いているもの（写真6）などがある（項7に方向を記述）。そして写真4、5、7などの事例で見られたが、左から（特に左下から）右上に向けて広がってゆくものが多い（項10、左から）。左下から右に向け1列目を置き、次にまた左から2列目を始めるという事例もしばしば見られる。写真8～10女5④は左下から始まり右上に向け広がっていく作例の典型である。

また4歳児組女子では写真11女4⑨のように最初に囲い作った例が4例（24%）見られた（項19、囲い）。写真11は左上から始まり時計回りに、消防士、貝、太鼓橋、十字架、家、ジープというように内容的な意味は見られないしかたで置かれていった。これも一種の羅列である（女子に見られる囲いについては後述）。なお羅列段階で現れる諸特徴は、岡崎甚幸らが幼稚園児に対して居住空間構成法をもちいて行った実験による「構造化された意味のある場をもたない空間構成」の作品群の「正面性保持」、「方向性保持」、「一様分布」、「列状」、「原初的囲い」といった内容と重なる³⁾。

混沌：羅列的に玩具を置く行為が止まらなくなり（項8、止まらない）、「混沌」とした様相を呈するもの。4歳児組男子2例（20%）、同女子6例（35%）、5歳児組男子1例（7%）、同女子なし。

混沌は4歳児組に多く見られる。写真12、13男4⑥の事例では単

に羅列的に並べるだけではなく、途中で動物を砂にめり込ませたり、上から砂をかけたり、戦闘機を手に取り飛行させるなどの遊びも混じっていたが、玩具を置いていくこと自体に熱中しだし、混沌とした有様となった（写真13）。写真14女4⑪-1は、上記男子の事例と同様に、羅列から始まり混沌に終わった作例である。途中で止まらなくなり、棚の玩具を順にほとんど置いていくことになった（写真15女4⑪-2）。4歳児組では、例えば動物を全部置く、棚の特定の段にあるものを全部置く、あるいは制限時間（約1時間）でやめるように言うまで置き続けるといったことが顕著に見られた。

2-2. 構造化の諸段階

構造化：箱庭全体を見て、置かれた諸玩具が何らかの意味連関の中、空間的に適切に配置されているもの。4歳児組男子1例（10%）、同女子なし、5歳児組男子4例（27%）、同女子2例（22%）。

写真16男4⑩は4歳児組では最も構造化された作例である。この作品では初期にレールを並べる（項16、最初にレール）。左下の工事現場、中央を横切る線路と駅、右上病院と救急車、左上の神社と鳥居といったように、意味のある「場」を構成している。また左下のかかなり広い「領域」では工事車両によって工事現場遊びがなされた。以降こうしたまとまりの狭いものを「場」、比較的広いものを「領域」と呼ぶことにする⁴⁾。「全体が明確に領域や場で構成されていることは構造化の一般的特徴の一つ」である。

なおこの作品では工事現場横に戦闘機があったり、線路より上側の街中に「場違い」に2隻の軍艦があったりもしている（こうしたものを「場違い」と呼ぶことにする）。しかしたくさん玩具を手にとって遊びたがる園児の箱庭においては、構造化された箱庭といえども場違いがあることが多い。

写真17男5⑫は混沌的性格を残しているが、意味をもった様々な場があり、また中央の中心領域は一匹のドラゴンに対して戦車や多数の動物が対峙するという「テーマ」でまとめられている。こ

写真4 女4⑦

写真5 女4⑧

写真6 男4⑤

写真7 男5⑧

写真8 女5④-1

写真9 女5④-2

写真10 女5④-3

写真11 女4⑨

写真12 男4⑥-1

写真13 男4⑥-2

写真14 女4⑪-1

写真15 女4⑪-2

写真 16 男 4 ⑩

写真 17 男 5 ⑫

写真 18 女 5 ⑧

写真 19 男 5 ⑬

写真 20 男 5 ⑮

写真 21 女 5 ⑨

写真 22 男 4 ⑧-1

写真 23 男 4 ⑧-2

写真 24 男 4 ⑨

写真 25 女 4 ⑪

写真 26 男 5 ⑪-1

写真 27 男 5 ⑪-2

写真 28 女 5 ⑦-1

写真 29 女 5 ⑦-2

うした「テーマ的まともにも構造化の一般的特徴」と言える（前事例写真 16 はこれほどテーマ性は表立っていないが、「工事現場のある町の風景」とでも言うことができる）。

写真 18 女 5 ⑧では、左上の少年がサッカーをしている運動場や中央下から上へ鳥居、神社、観音様、五重塔と並んだ宗教空間など、多様な場をもつ町の風景から始めて、中央下に植物で囲われたお花屋さんの領域が出現する。それを中心とするまとまった形の箱庭となった。ただ終了前にお花屋さん部分にどんどん植物を詰め込み始める。写真 19 男 5 ⑬もレールと電車と駅で鉄道遊びをすることから始める。水面を作ったり、山を作る。次に工事車両で工事現場遊び。「箱庭楽しい」と言いながら遊ぶ。水面を環状につなげて水路とし、船を回して遊ぶ。水路には太鼓橋をかけ、トレーラーを行き来させる。遊びの展開の中で、それぞれの場所が意味のある領域となり、全体で風景を構成するものとなっている。写真 20 男 5 ⑮は早い段階で中心と四隅にものを配する構成ができる。その後、吟味して再配置を繰り返しながら町の風景を構成していく（項 13、再配置、吟味）。その中に海賊対海賊、騎士対騎士の戦い、神社を守る騎士たち等々の場面を入れていく。また、そうした場面が可能なように、広場を作ったり、場と場をつなぐ通路空間を既存の玩具を動かすことで作っていく。すなわちこの作者の場合、単に戦いなど行為のイメージ（図）を作るだけではなく、その背景となる「地」的な空間を意識して作り出している。項 14 の「空間設置」は、このように背景的な

「地」をわざわざ既存玩具を動かして作ったり、写真 19 の事例のように砂で地形を造成したりする操作がある場合を表す。

写真 21 女 5 ⑨は、まず中心と四隅に玩具を置くことから始め、建物などを周囲におき「囲い」配置とする。右下の玩具をどけて、そこに室内空間を作る。この室内空間が箱庭全体の中心的部分となる。全体的に見ても各部分は意味のある場や領域として形成されている。後半で人物、乗り物、動物を使って演じる遊びをおこなう。

部分的構造化：羅列・混沌と構造化は両極として、それぞれにはっきりと把握できる作品が存在するが、両者の間には中間の様相の作品も存在する。羅列的、混沌の箱庭に構造化の要素が部分的、萌芽的に存在している作品のなかで、骨格的なものがある程度見て取れる箱庭を「部分的構造化」とする。4 歳児組男子 2 例（20%）、同女子 1 例（6%）、5 歳児組男子 1 例（7%）、同女子なし。

写真 22、23 男 4 ⑧は部分的に構造化された例である。作り始めてすぐにレールをつなぐ（写真 22）。レールに SL や電車、トンネルを置いたり、近くに駅があったりと、いくつかの部分に意味のある配置が出現している。しかし戦艦や飛行機などが周囲と無関係に置いてあったり、全体的にも羅列的な傾向が強く残っている。写真 24 男 4 ⑨も部分的構造化の例で、これもレールをつなぐところから始めた。建物は縦横配置的で羅列的な傾向が強く残っている。

写真 25 女 4 ⑪は女子の例で、四隅に壁が建てられ、また左側には家具が置かれ、内部空間的ではあるが、右側には小さな家々並べられている。置かれた玩具は全体的に羅列的である。

テーマを見つけて構造化：初めは全くの羅列であるが、突然テーマを見だし、作品が改めて内容のあるものに根本的に作り直されるもの。4 歳児組男子および同女子なし、5 歳児組男子 1 例（7%）、同女子 1 例（11%）。

写真 26、27 男 5 ⑪の事例では、前半は写真 8～10 女 5 ④と同様、左下から右上へ機械的にどんどん置いていき、右上に達したところ

で、空いた隙間に詰め込むといったものであった（写真 26）。ところが、ある時点で棚にあるレールに目を留め、レールを置く。その後、鉄道遊びに集中するなかで、羅列段階の多くのものが取り去られ、全体が意味のある玩具配置の箱庭（写真 27）となった。

写真 28、29 女 5 ⑦も最初は左下から始まる羅列であったが、右下にベッドが置かれると、その周りに室内空間が形成されていく。次いで右下の室内空間を確保したまま左半分は様々な形で外部の町の空間が試される。さらに室内空間を充実させた後、それ以外をすべて撤去し、左には新たに板積み木を使って高架線路が熱心に構築され、室内空間を取り巻く外部空間が構成された。

2-3. その他の事例

以上はまとまった形となる箱庭の分類である。それ以外は「作らないなど」グループと「変転」グループに大きく分かれる。またこの二つのグループともに、行為を箱の中でする者と、そこまで来ら

れず、棚の前に留まる者とがいる。棚の前に留まる園児はほとんどの時間棚側を向いており、観察者に対しては背中を向けている（項 1、棚の所）。

作らないなど：全く作らない、あるいはほとんど作らない事例や玩具遊びだけが現れる事例。4 歳児組男子 2 例（20%）、同女子 3 例（18%）5 歳児組男子 2 例（13%）、同女子 1 例（11%）。

しばらくじっと玩具棚を見つづけ、少し玩具に触れるだけで帰ってしまった園児が 4 歳児組女子に 1 名と 5 歳児組男子に 2 名いた。写真 30 男 4 ⑩は棚の前でしばらくもじもじした後、棚の前で戦闘機や飛行機を手にとり、しばらくの間飛行遊びをして帰った例である（箱の位置は写真右下）。箱内の例としては、ほんのいくつか玩具を箱におくだけで帰った者が 4 歳児組男子 1 名、同女子 2 名、砂の中で乗り物を動かして遊んだだけが 5 歳児組女子で 1 名である。

変転：その時々何らかの形にはなるが、場面がめまぐるしく変

表 1 箱庭制作に見られた諸要素

		4歳児組 男子										
	分類	作らずなど		変転		羅列		混沌		部分		構造
		事例番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
		写真番号	30		33		6	12,13		22,23	24	
		制作時間(分)	15		35	57	37	53	45	21	32	
		1	棚の所	○								
社会心理	態度内容	2	しゃべらない	○			前○	○		-		
		3	戦い	△				□		△		○
		4	ヘビなど							□	○	
作り方など	原初的	5	変更なし					□	□	□		
		6	他をずらす					○	○	○		
		7	羅列方向性など					縦横	右		△	縦横
	中度など	8	止まらない						○	○		後△
		9	単純砂遊び			○	○	○	○			△
		10	左から				左下		左下		左下	左下
	高度	11	単純移動			○	○					
		12	演じる遊び	○		○	○	△	○		○	○
		13	再配置、吟味									□
男女差	男性	14	空間設置									○
		15	交通レイアウト								○	○
		16	最初にレール		○					○	○	○
	女性	17	多元性の空間							□	△	○
		18	求心的形式							□		
		19	困い							△		
	20	女性的一元性										

		5歳児組 男子																			
	分類	作らずなど					変転					羅列		混沌	部分	テーマ	構造化				
		事例番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮				
		写真番号	30		31					7		26,27	17	19		20					
		制作時間(分)	15		39	52		18	2	9	48	44	37	36	34	45	56				
		1	棚の所	○	○	○															
社会心理	態度内容	2	しゃべらない	○						○	○										
		3	戦い	△				-				後○		○			○				
		4	ヘビなど																		
作り方など	原初的	5	変更なし							○	○	前○	前○	前1	○						
		6	他をずらす							○	○	前○	前○								
		7	羅列方向性など						正面	雑然	正面	右	縦横	縦横	前縦横						
	中度など	8	止まらない									前○	○	□							
		9	単純砂遊び			○	○	○				後○					前△				
		10	左から							左中	左下	左下	後○	左下	左上						
	高度	11	単純移動			○	○	○				後○	後○	○	○	○	○				
		12	演じる遊び	○		○	○	○				後○	後○	○	○	○	○				
		13	再配置、吟味											後○	□	○	○				
男女差	男性	14	空間設置										□	○	○	○					
		15	交通レイアウト										○	後○	○	○	○				
		16	最初にレール		○								○	後○	○	○	○				
	女性	17	多元性の空間										△	後○	○	○	○				
		18	求心的形式												□		○				
		19	困い																		
	20	女性的一元性																			

		4歳児組 女子																	
	分類	作らずなど			変転			羅列			混沌							部分	
		事例番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰
		写真番号	30			34		32	4	5	11		14,15			37,38		39,40	25
		制作時間(分)	2	8	26	46	60	44	25	6	11	39	51	51	63	26	45	6	
		1	棚の所						○							前○			
社会心理	態度内容	2	しゃべらない					前○	○	○	○	○	○		○	○		□	
		3	戦い																
		4	ヘビなど												○	1		○	
作り方など	原初的	5	変更なし								○	○	□	□		□	○	○	
		6	他をずらす										△			○	○	○	
		7	羅列方向性など					正面		左上	奥	困い	縦横	雑然	雑然	縦横	雑然	縦横	△
	中度など	8	止まらない										○	○	前○	○	○		
		9	単純砂遊び			△	○	○			○	○		△				△	
		10	左から							左下	左下	左上	左上		左下	左中	左上	左下	左上
	高度	11	単純移動			○				○				□	△	○		○	
		12	演じる遊び					△					△	○	後○		△	○	
		13	再配置、吟味						○										
男女差	男性	14	空間設置																
		15	交通レイアウト												後○	○			
		16	最初にレール																
	女性	17	多元性の空間																
		18	求心的形式							○									
		19	困い						□										
	20	女性的一元性									○	○					前□	△	

		5歳児組女子												
	分類	作らず		変転		羅列		混沌	部分	テーマ	構造化			
		事例番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨			
		写真番号	28	25	31	37	13	-	56	18	21			
		制作時間(分)	前○	前○	-	○ <td>○</td> <td>-</td> <td></td> <td></td> <td>○</td>	○	-			○			
		1	棚の所	○	○									
社会心理	態度内容	2	しゃべらない	○										
		3	戦い	○										
		4	ヘビなど	○										
作り方など	原初的	5	変更なし											
		6	他をずらす											
		7	羅列方向性など											
	中度など	8	止まらない											
		9	単純砂遊び			△	○	○						
		10	左から							左下	左下	-	左下	
	高度	11	単純移動			○						前○	○	
		12	演じる遊び				△					後□	○	
		13	再配置、吟味									後○	○	
男女差	男性	14	空間設置								後○	○		
		15	交通レイアウト									後○	○	
		16	最初にレール									後○	○	
	女性	17	多元性の空間									後○	○	
		18	求心的形式									後○	○	
		19	困い										前□	△
	20	女性的一元性												

5歳児組 男子															
作らずなど		変転				羅列		混沌	部分	テーマ	構造化				
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	
		31					7			26,27	17	19		20	
		39	52		18	2	9	48	44	37	36	34	45	56	
○	○														
○	○	○		-		○	○	○							
		○	□	□				後○			○			○	
		○								前1	○				
						○	○	前○	前○	前○					
								前○							
					正面	雑然	正面	右	縦横	縦横	前縦横				
									前○	○					
								後○			□				
			○	○	○								前△		
						左中	左下	左下		左下	左上				
		○	○	○				後○	後○						
		○	○	○	○			後○						○	
			□							後○	□	○	○	○	
											□			○	
			○						○	後○		○	○	○	
				○					○			○	○		
									△	後○	○	○	○		
		○									□			○	

		4歳児組 女子																			
		分類	作らずなど			変転			羅列				混沌						部分		
		事例番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰		
		写真番号				34		32	4	5	11		14,15			37,38		39,40	25		
		制作時間(分)		2	8	26	46	60	44	25	6	11	39	51	51	63	26	45	6		
社会心理	態度	1 棚の所						○								前○					
	内容	2 しやべらない					前○	○	○	○	○	○	○		○	○			□		
	内容	3 戦い																			
	内容	4 ヘビなど											○	1		1		○			
作り方など	原初的	5 変更なし										○	○	□	□		□	○	□	○	
		6 他をずらす											△	○	□		□	○	□	○	
		7 羅列方向性など					正面			左上	奥	困い	縦横	雑然	雑然	縦横	雑然	縦横	縦横	△	
	中度など	8 止まらない						□						○	○	前○	○	○	○		
		9 単純砂遊び				△	○	○		○	○				△					△	
		10 左から								左下	左下	左上	左上		左下	左中	左上	左下	左下	左上	
	高度	11 単純移動				○			○					□	△	○	○		○		
		12 演じる遊び					△								△	○	後○		△	○	
		13 再配置、吟味							○						△						
	男女差	男性	14 空間設置																		
			15 交通レイアウト														後○	○			
			16 最初にレール																		
17 多元性の空間																					
女性		18 求心的形式							○												
		19 困い					□					○	○				○			△	
		20 女性的一元性																	前□		

5歳児組女子											
作らず		変転		羅列				テーマ		構造化	
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨			
		35,36	8~10				28,29	18	21		
28	25	31	37	13	-		56	65	50		
前○	前○		□								
-	-	-	○	○	-					○	
							○		○		
			○	□							
			縦横	正面	縦横	前縦横					
○	前○			終△				後○			
			左下	左下	-	左下					
	○			△	○	前○	後□	○	○		
○		-					後○	○	○		
		○					後○	○	○		
		○					後○		□		
		○				後○	○	○	○		
		□			前□	後○	○	○	○		

表中の分類の「作らず」は「作らずなど」、「部分」は「部分的構造化」、「テーマ」は「テーマを見つけて構造化」の略。
○はその特徴が明確に現れた場合、□は、完全ではないがほとんどの状態である場合、△は低程度に現れた場合を示す。
前○、後○は前半、後半に（あるいは最初に、最後に）○状態であることを表す。なお記録がなく不明なものは-を記入した。

化していくもの。4歳児組男子2例（20%）、同女子3例（18%）、5歳児組男子4例（27%）、同女子2例（22%）。

棚の前の事例：写真 31 男 5③はへびやワニを両手に持って戦わせたり、床にワニ軍団同士の対決場面を配置したりして遊び続けた。写真 32 女 4⑥は棚の上や棚の前で次々と様々な場面を作った。

砂箱内の事例：写真 33 男 4③は次々といろいろな玩具を手に取りその時その時に話をしながら遊ぶ。軍艦を砂に潜らせたり、砂をかけたり、砂で遊ぶ場面が多い。写真 34 女 4④は、砂をかき混ぜたり、砂一面に手形をつけたりした後、おしまいに砂に顔を描いた事例である。写真 35、36 女 5③は砂箱の中で構造化されたものを作りながら、いくつもの場面に変転した例である。途中で中央部に囲いや家具による室内的空間が出現したりするが、それも変わってゆき写真 36 になる。なお変転には創作行為の発達段階とは直接関係なく、写真 33 のような原初的段階のものから、写真 35、36 のような構造化の進んだ段階のものまで様々である。

3. 構造化された作品と男女に普遍的な空間イメージとの関連

男子の構造化された作品のうち写真 20 男 5⑤の 1 作品を除き、残りの写真 16 男 4⑩、写真 17 男 5⑫、写真 19 男 5⑬、写真 27 男 5⑭-2 は全て、本文の 1－2 で述べた、移動・侵入的、外部的、多元的といった特徴をもつ多元性の空間である（項 17、多元性の空間）。部分的構造化の作品にも多元性の空間の萌芽が見られる。一方の写真 20 は戦い・対決的な場面があちこちにちりばめられており、全体としても中心に凸的な火山があり、図 1 の求心的形式の男性的一元性の空間イメージ（項 18、求心的形式）と関連する。この事例は、岡田天理資料では小学 3 年段階で多数現れた戦いのイメージ（写真 3）が、年齢的に見て早い段階で現れた例と見なすことができる。

女子の構造化された作品、写真 18 女 5⑧、写真 21 女 5⑨、写真 29 女 5⑦-2 は、住人的、内部的、内包的、一元的な女性的一元性の

空間が中心となっている。写真 18 では下側のお花屋さんの領域が女性的一元性の空間であるが、それができると、その場所を作った本人自身が、どんどんそこに引きつけられていった。写真 21 では全体の街の風景が女性的一元性の空間であり、右下の室内空間も女性的一元性という二重の構造をもつ。写真 29 は前半全く羅列的であったのが、途中で右下に室内空間（女性的一元性の空間）が確立されると、それが核となって全体が構造化された。女性的一元性の空間と分類できる箱庭作品のうち、女性的一元性の空間と周囲の外部空間という構成をとるものも多いが、保育園児の作品ではほとんどそれであり、家具で作られた室内空間と外部空間というかたちであった。項 20 で示すように女子で構造化された作品は全て女性的一元性の空間である。また部分的構造化の段階（写真 25 女 4⑭）でもその傾向が見て取れる。

男女差についての補足：男女差については、構造化の段階で男子の多元性の空間、女子の女性的一元性の空間といったはっきりしたかたちをとっているが、それ以前にも違いの兆候は存在する。

女子の囲いから始まる作例など：先述のように 4 歳児組女子では明瞭な囲いを作ることから始めた園児が 4 名（24%）いる（項 19、囲い）。写真 11 女 4⑨は囲いだけで終わった例だが、他の 3 事例では囲いができた後、中にどんどん置いていき、全体が縦横形式の羅列や混沌となった（項 8）。写真 37 女 4⑭-1 はこの時点で終われば女性的一元性の形式をもった町の風景だが、さらにどんどん置いてゆき、結局写真 38 女 4⑭-2 の混沌の状態となった。こうした囲いは女性的一元性の空間の内包性、内部性の先駆的な現れであろう。一方このような囲いを作る例は男子では一例もないとみなされるものであった^{注 5)}。写真 39 女 4⑯-1 は住人的で、内部的、一元的であり、室内空間としての女性的一元性風の様相を示す。しかしこの事例も制作はこれで終わりとならず、どんどん詰め込んでゆき、写真 40 女 4⑯-2 の混沌状態となった。

写真 30 男 4①

写真 31 男 5③

写真 32 女 4⑥

写真 33 男 4③

写真 34 女 4④

写真 35 女 5③-1

写真 36 女 5③-2

写真 37 女 4⑭-1

写真 38 女 4⑭-2

写真 39 女 4⑯-1

写真 40 女 4⑯-2

写真 41 2012 年 5 歳児組男子

男子のレールから始まる作例：同じ4歳児組で男子の部分的構造化の2作品（写真22、23男4⑧、写真24男4⑨）はどちらも最初の段階でレールをつないだ（項16、最初にレール）。

4. 創作行為の発達と遊びの諸形態の発達

羅列・詰め込み遊び：羅列といえども、先に述べたように、そこにはすでカテゴリーのまとまりや、列状や向きをそろえるなどの形態的な秩序がある。

羅列の延長として、特に4歳児組で玩具をどんどん置いてゆき止まらなくなることが多く（項8、止まらない）、混沌とした様相を呈する。写真12、13男4⑥の事例（制作時間53分）では、開始30分頃、置くことが止まらなくなってきたので、立会人である観察者が「もうこれくらいでおしまいにしよう」と話しかけたところ、「いやや」と返事をし、さらに20分余り玩具を置きつづけた。写真39、40女4⑩の事例（45分）では、写真40を作り終わった後「もう一回する」と言って観察者を驚かせた。混沌となる事例では、制作時間の長さを含めてこれらの事実、は、どんどん置いていく行為自体が自律した強い欲求として存在していることを示している（一方で写真4女4⑦、写真5女4⑧の事例で見られた、最後に並べた玩具を砂もろともにかき混ぜる行為は、おしまいにすること、リセットすることといった欲求も同時に存在していることを示している）。

写真37女4⑭-1や写真39女4⑯-1は、最初は女性的一元性風であったのに、結局写真38女4⑭-2、写真40女4⑯-2の混沌となった。この2例および同様の経過をたどった事例女4⑮の制作時間は63分、45分、26分である。すなわち彼女たちはたくさんの玩具を前にして、ずっと遊んでいたかったのであり、それがこの年齢段階では女性的一元性のイメージを充実、完成させる方向ではなく、様々な玩具を手に取り、集め、並べ、詰め込んでいくことへの熱中となったのである。一方4歳児組で混沌とならず、女性的一元性の傾向をもつ作品として残ったものは写真25女4⑰の1事例のみで、制作はわずか6分で終わっている。

単純な砂遊び：4歳児組の段階で原初的に見える要素として羅列の他には単純な砂遊び（項9）が頻繁に現れる。砂に手を突っ込む、砂をたたく、砂をかき混ぜる、乗り物など玩具を砂にめり込ませながら動かす、玩具を砂に埋める、並べた玩具の上にすくった砂をふりかける、等々である。羅列的に玩具を置く場合も、砂に押し込むように置くことが目に付く。これらの行為はショベルカーで砂をすくってダンプにいれるとか、背景としての山や川を砂で作るといったような意味のあるものではなく、砂にさわることの手触りや手応えなどの感覚やその行為自体を目的としている（あるいは楽しんでいる）ように見える^{注6)}。

演じる遊び：羅列・詰め込み遊びや単純な砂遊びに次ぐ段階のものとして目にとまるものは「演じる遊び」（項12）である。例えば4歳児組の写真12、13男4⑥の事例では、羅列、詰め込みの途中に戦闘機を手に取り飛行を演じる遊びをおこなった。演じる遊びは羅列段階で既に現れ、以降の構造化の段階でも存在し続ける。

構造化以前の段階のものとしては、写真30男4①、写真31男5③、写真33男4③の事例の他、ショベルカーで砂をすくってダンプカーに積み込むといった例などがあった。構造化の段階では、例えば男子で電車などの乗り物遊びが頻繁に現れる^{注7)}。そして構造化以

前の演じる遊びの段階と構造化された箱庭の段階の違いは何かというと、後者は物理的に「背景が実体化されている」という性格をもつことである。すなわちレールや道路、水路、さらにそれらが巡る街並みや景観などが現れているのである。

ところで演じる遊びのみが現れ、背景（「地」的、空間的なもの）が作られない段階（構造化以前）について考えてみると、その場合においても、例えば戦闘機なりショベルカーなりがもつ役割、どのような場所や状況において、どのような働きをするかという筋書き・意味連関は頭の中で背景として形成されているはずである。しかし構造化以前の演じる遊びの場合はそうした背景は実体化されない。つまり構造化された箱庭は「演じる遊び」と「背景の実体化」が合体したものと考えることができるのである。

「背景の実体化」とは空間的性格をもつことがらである。そこで次に空間的感覚の発達を見ていきたい。

場の増加、空間的感覚の萌芽：同じ混沌とした作例でも、4歳児組のものは機械的に隙間なく詰め込む結果（例えば縦横的羅列）、どこも均質で単調な印象であるのに対して、5歳児組では縦横的羅列形式は減って、それぞれの場所が差異化し、あちこちに場あるいは「場的な空間」のあるものが増える。場的な空間とは、場とまでは言えないものの、動物や兵隊、乗り物、工事車両等々が羅列的ではあるがまとめて置かれたところである。5歳児組では建物の間などの隙間が場的な空間となっている場合も多い。

写真41^{注8)}は混沌と構造化の中間的作品であるが、作り始めは幾分多元性の空間の構成が現れていた。しかし次第に玩具が詰め込まれてゆき、混沌に近づいていったが、そここの隙間が交通空間のような場の空間として残った。つまり4歳児組の羅列・混沌では物の集まりばかりに目が向けられていたが、5歳児組の羅列・混沌では隙間や空間的なものが見いだされているのである。空間的感覚の萌芽といえる。なお4歳児組でも写真23男4⑧-2のような部分的構造化段階以降の作品では、場や場の空間は明確に現れている。

全体的な空間的感覚（全体的構成や全体的骨格）の出現と世界像遊び：構造化された作品には全体にわたる領域的分節化や領域相互のネットワーク化などの空間的な把握が見て取れる。男子では構造化された作品のほとんどでレールや乗り物が使われているが、このことについて考えると、例えばレールを初めに置く場合、そこに自ずと骨格が出現する。するとその周囲にいくつかの領域や場を見いだすことはごく自然な流れとして生じうる。構造化を成立させる全体的な空間的感覚の発達の出現は、骨格の構築あるいは領域的分節化の両方の側面をもち、そのどちらの形で現れうる。（ただし全体的な空間的感覚が十分に発達していない段階でもレール＝骨格的要素を使用する場合はあるわけで、写真24男4⑨のように縦横的な羅列的傾向が強く残る作例はそうした例といえるだろう。）

さて構造化を成立させる全体的な空間的感覚には明確な枠組が見て取れる。「3. 構造化された作品と男女に普遍的な空間イメージとの関連」で述べたように、構造化された作品は、男子においては「多元性の空間イメージ」や「男性的一元性の空間イメージ」、また女子では「女性的一元性の空間イメージ」といった形式をとって現れてきているのである。

多元性の空間イメージの基礎にある構造は、改めて述べるなら、写真1のように、複数の何らかの領域や物体が連続的あるいは非連

統的に存在しており、その間を何か（主体的なもの、客体的なもの、単数、複数など様々）が動いているといったイメージである（移動・侵入的、多元的、外部的、その他に非対称性や、水平に広がっていく性質などをもつ）。空間的感覚の枠組はこのような構造をもつ。それは受け皿あるいはひな形のようなものであり、そこにしかるべきものが盛り込まれていくことで外界の認識が進んでいく枠組（=意味連関を定着させる枠組）である。男子の場合、このひな形、受け皿にぴったりと当てはまるものであるレールや電車、道路や乗り物といったもの（移動・侵入性）に自ずと興味が引かれ、またそれらが引き金（鍵刺激）になってシステムは動きだし、街や風景の広がりなど（多元性、外部性）がはめ込まれてゆく。そしてこの枠組に沿った構造化した箱庭が実現される。女子では家具などをきっかけに周囲に室内的空間が広がり、箱庭全体の中の中心的な空間となる。そこは人々が楽しげに暮らしているイメージである女性的一元性の空間であり、その出現を契機に、空想や連想が展開し、遊びが繰り広げられ、全体として構造化された箱庭となる^{注9)}。

こうした演じる遊びと背景の実体化が統合された「想像的情景を作る遊び」を、ここで改めて「世界像遊び」と呼ぶことにする^{注10)}。今ここにはないものを思い描く能力は想像力であり、創作する能力であるが、それは象徴的なもの（玩具などの物体、あるいは記号、言葉など）を適切に配置して何らかの情景をつくり出す（意味連関の定着）能力である。そしてそれは構造化された箱庭の制作（=世界像遊び）の能力である。またその枠組を空間的側面から見ると多元性の空間イメージ、女性的一元性の空間イメージ等の基本的空間イメージとなると考えられる。

このように多元性の空間イメージなどの基本的空間イメージが、そこに意味連関が定着していく原型的な枠組であるという考えを裏付けるものとして次の事実を挙げることができる。羅列の段階では変更もなく置いていく（項5、変更なし）、あるいは詰め込むためにずらす程度（項6、他をずらす）であったが、構造化の段階では、相互的、空間的関連性を考慮した取り替え、置き直しなどの場所・配置に関する試行錯誤、吟味の操作が現れる（項13、再配置、吟味^{注11)}）。これら再配置、吟味の操作は意味連関を定着させる操作であるが、また空間的な相互関係や場所の感覚といった認識を示すものでもある。すなわち、これらの操作と多元性の空間イメージなど基本的空間イメージの出現とは同じことがらの二側面なのである。

同じ構造化された作例とはいえど、写真16男4⑩、写真17男5⑫、写真18女5⑧の3作品が場違いや、前段階の混沌的な性格を残しているのに対して、写真19男5⑬、写真20男5⑭、写真21女5⑨の3作品は余計な物が存在しない明確なものとなっている。写真19の砂の造成による運河づくりや、写真20での登場人物が行動するための場所を広げたり、通路のための空間を開くというような空間そのものに関わる操作（項14、空間設置）がより強くでる場合、こうした明確な空間的な領域の認識が取捨選択の作用を伴い、「場違い」をふるいわけ、排除することになるのかもしれない。

基本的空間イメージが意味連関を定着していく枠組であり、空間的認識・操作と一体であることは、「テーマを見つけて構造化」の2事例（写真26、27男5⑪および写真28、29女5⑦）でも見て取ることができる。全くの羅列的であったものが、男子ではレールを置くことをきっかけとした多元性の空間として、また女子では出現

した女性的一元性の空間が中心を占めるものとして、構造化が劇的かついきなり出現しているのである。

すなわち、この事実はすでに潜在的に育っていた枠組のシステムにスイッチが入ったというふうに見えることができるのである。つまり多元性や女性的一元性などの基本的空間イメージは、成長に伴い学習により徐々に形成されていくものではなく、生まれもったシステムとして、ある時期に最初から全体として生じて来るものであるということである。そのことは男女では全く別の形式で、かつ男子は男子で共通、女子は女子で共通であるという事実が示している。またこれは構造化の段階とそれ以前の羅列・混沌の段階の間に、ある種の不連続があるように感じる理由でもあろう。

このような形で想像力や創造力は、われわれがもつ認識システムの枠組（空間的にはこれらの空間イメージ）に支えられており、かつ規定されているといえる。これまで基本的な空間イメージとしてきたものは、はまさに「原型的」空間イメージと呼べるものであったわけである^{注12)}。こういう考えを強化するものとして、リラックスしてとても楽しそうに遊んでいるときにこうしたイメージが自然と現れて来るという事実を指摘することができる。

写真17男5⑫、写真18女5⑧は混沌的衝動が残っており、様々な片隅の場に満ちた作風となっている。このように構造化の枠組（原型的空間イメージ）は、混沌的傾向に半ば埋もれて存在する場合がある。写真41は枠組がほとんど埋もれた例であり、4歳児組女子の写真38女4⑫-2、写真40女4⑬-2の事例は最初に枠組は現れかけたものの、完全に埋もれてしまった例といえる。

5. 心理・社会的発達と箱庭制作

ほとんどの園児が箱庭を楽しんだと考えられる。それは時間の長さに表れている。一方で作らずにすぐ帰ってしまう園児がいた。また柵の前に留まり、観察者に背を向けたままの園児もいた。見知らぬ大人である観察者が注目している箱庭のあるところへ出ていって何かを作るということは、舞台上に立ち、人前で自分を表現することと同じである。子どもの成長過程は、乳児と母親、家族との関係から始まり、外部社会に向かって自分の心理・社会的なわばりを一歩ずつ勝ち取ってゆく過程であるが、そこには前向きな気持ちだけではなく、ほぼ同じだけの不安が存在する。そして外に向かう気持ちと不安のバランスは一人一人異なっている。そのバランスが内向的に傾く園児は箱庭の所まで出て来なかったりするわけである。

写真31男5③の事例で園児はずっと柵の前にいて遊び続けた。ワニとワニの戦い、カメ群とワニ群の戦い、ヘビ群とヘビ群の戦いなど、大半の時間を対決、戦闘の場面を演じることに費やした。写真30男4①の園児は柵を向いて立ちつくしていたが、終わり近くに戦闘機を手に取りこちらを向き、飛行を演じる遊びをおこなった。写真32女4⑥では、柵の上と柵の前にいくつかの構造物を作ったが、最後には一匹のコアラに対して多数の動物たちが求心的に向き合う場面を作った。それは対決的意味をもつ求心的形式の男性的一元性の空間イメージである。

外部世界に向かって心理・社会的なわばりを広げていく過程は対決的、攻撃的力動の上にあるが、これらの事例に現れている攻撃的、戦闘的なイメージは、そのための心理的な助走や準備運動そのものといえる。なお柵の前に留まる園児は全員喋らないという特徴があ

った（「項1、棚の所」と「項2、しゃべらない」の対応）。

岡田天理資料の小学3年男子では過半が写真3のように戦いをテーマとした箱庭となっている。今回保育園の段階では全面的に戦いの場面となったものは写真20男5⑮の事例以外なかったが、男子では「項3、戦い」で示すように、かなりの頻度で戦いのイメージは現れる（戦闘機、戦車、戦艦の使用や戦いの場面を演じるなど）。一方女子では戦いのイメージは出て来ないが、写真14女4⑩-1のようにヘビが使われる箱庭はかなりある（項4、ヘビなど。なお表中の1は1匹だが、目立つかたちで置いてあったもの）。箱庭玩具には極彩色のヘビやカエルが置いてあり、女子でそれらがわざわざ使われる様子は男子の戦いのイメージと同じような心理・社会的意味があるように思われる。例えば写真21女5⑨では後半の一時ヘビが多数室内空間のところに持ち込まれ遊ばれた。作者は表情豊かに演じる遊びはおこなうものの、終わりまで一言も喋らなかった。つまり彼女はヘビを観察者の前でもて遊んでみせることで、観察者（＝外部社会の大人）に話しかけるための助走をしていたと考えられる。

写真19男5⑬の園児は、初め小さな声でささやくようにしか話せなかったが、遊びに夢中になり、「箱庭、楽しい」と言いながら、だんだん大きな声で話をするようになった。遊びに夢中になることで、幾分すくんでいた状態から解放されたといえよう。写真28、29女5⑦の「テーマを見つけて構造化」の事例では長時間かけて（56分）箱庭を作り上げたが、本児は何かをやり遂げたという表情で、満面の笑みを浮かべて保育室へ戻っていった。これらは観察者としても感動的な体験である。彼らは、実際の箱庭療法と同様、心理・社会的な成長過程を少しなりとも進めたと思われる。

子供の遊びは安心してリラックスした状態でないと発現しない。そのことは5歳児組で羅列的作品を作った園児（写真7男5⑧、写真8～10女5④および男5⑦、女5⑤の例）が全員しゃべらないということにも現れている（女5⑥は不明）。写真8～10の作者はほとんどの時間棚の前において観察者に背を向けていた。彼らには潜在的に構造化した作品を作る能力がすでに発達している可能性があるが、緊張で楽しく遊ばなかったことで羅列の箱庭しか作らなかった考えることができる^{注13)}。一方写真31男5③や写真32女4⑥の事例では観察者に背中を向けたままだったが、長時間遊んでいる。ある程度リラックスできる片隅空間を見つけて遊んだと言える。

その他に心理・社会的意味をもったことがらとして、多くの園児で箱庭を左から置き始めたことをあげることができる（項10、左から）。箱庭療法では左を内界あるいは無意識の側、右を外界、意識の側とする。左から右に置いていったということは、自分の世界から外の世界へと向かっていったことと同じと考えられる。

6. 結語 まとめ

箱庭における創作行為の発達過程について、ごく大きく捉えると、羅列・混沌の段階と、諸玩具が意味をもって空間的に適切に配置される構造化の段階に分けることができた。

羅列は原初の段階であるが、最も雑然とした羅列の例でも、例えば動物ばかりを使うといったまとまりを見ることができる。これはカテゴリーによる分類化がわれわれの認識の最も基本的要素の一つとして備わっていることの表れであろう。羅列段階では形態的に、列状に並べる、方向性をそろえる（正面向き、奥向き、右向き、左

向き、縦横向きなど）が頻繁に現れる。また特に4歳児組では羅列が止まらなくなり、詰め込むことに熱中して、混沌とした様相を呈することが多い^{注14)}。羅列段階で見られるこれらのカテゴリー分けや形態的秩序化および引き続いて起こる詰め込みなどは、以降の発達段階での、対象に興味をもって手に取ること、それを何らかの形で認識すること（分類・整理すること）、収集、所有すること等々の行為の基底にある自律性を備えた基本的要素の現れと考えることができる。また形態的秩序化は構造化の段階で表に現れることはなくなるが、人間の世界像形成の最も基本的要素であり、われわれが意識的、無意識的に感じる秩序感の基盤として後の成長段階でも存在し続けていると考えることができる^{注15)}。

箱庭に現れる砂を使った遊びは様々であるが、羅列段階で頻繁に現れる「単純な砂遊び」は、さわってみる、感触や手応えを味わうといったように行為自体を楽しむという側面がある。これらの行為もまた、自分を取り巻く諸々のものを認識するために備わった基本的行動様式の現れなのであろう。

次いで、自動車が動いている場面を演じるといった「演じる遊び」が現れて来る。演じる遊びにおいては、どのような場所や状況においてそれが動くなり、働くなりするかといった背景の意味連関は当人の頭の中には存在するわけだが、構造化以前の段階での演じる遊びにおいては、背景は実際の物理的なものとして箱庭につくられていない。そうした次第で、構造化された箱庭制作は演じる遊びと背景の実体化が合体したものと考えることができる。背景とは舞台のようなものであり、空間的性質をもつ。すなわち構造化は空間的認識能力および空間的操作能力と一体である。なお空間的に構造化された箱庭作品出現に先だって、場や場的な空間が増えるといった空間的感覚の萌芽が見られる。

男女の差異に関しては、構造化以前の段階では、構造化において見られる男女の特徴がいくらか先駆的に現れているという程度であるが、構造化の段階では箱庭の空間的形式に関する男女差は著しい。構造化された作品として出現したもの全てが、男子では多元性の空間イメージ（一部は年齢的に次段階の男性的一元性の空間イメージの要素をもつ）、女子では女性的一元性の空間イメージの形式をとるものであった。つまり構造化した作品は一番最初からいきなり「原型的空間イメージ」という完成された形式をとって現れてくる（もし完成形で現れてくるのではないとしたら、もっと男女の要素が混じり合ったり、あるいは反転したりしたかたちで構造化が現れてきてもいいはずである）。それらのイメージは空間的に構造化された箱庭作品を成立させる枠組みであり、人間男女の世界認識において、そこにしかるべき様々な内容が盛り込まれるひな型と考えられる

（それは思考そのものの枠組とも密接に関係する）。これら原型的空間的イメージには、コンラート・ローレンツ以来の言葉を使うなら、「生得的」な要素が多分に含まれていると言うことができよう。

謝辞

実験に協力してくださった社会福祉法人明石惠泉福祉会、第二惠泉保育園の園長先生をはじめ職員の方々、また箱庭で遊んでくれた多くの園児の皆さんに改めてお礼を申し上げます。

箱庭研究に関する主な既発表論文

- i) 坂戸省三：創作・表現行為および空間的表現の様態とその意味の箱庭療法を通じての考察、一 ライフ・サイクルと空間のイメージ構成に関する研究 第1報一、日本建築学会計画系論文報告集、第367号、pp.80-90、1986.9
- ii) 坂戸省三：男女それぞれにおける空間性の発達過程、一 ライフ・サイクルと空間のイメージ構成に関する研究 第2報一、日本建築学会計画系論文報告集、第377号、pp.97-105、1987.7
- iii) 坂戸省三：男女の空間的諸特性と世界像の形成、一 ライフ・サイクルと空間のイメージ構成に関する研究 第3報一、日本建築学会計画系論文報告集、第402号、pp.107-118、1989.8
- iv) 坂戸省三：人間における世界像形成の生物学的基盤について、一 ライフ・サイクルと空間のイメージ構成に関する研究 第4報一、日本建築学会計画系論文報告集、第421号、pp.111-120、1991.3
- v) 坂戸省三：人間における諸空間性の生物学的基盤について、一 ライフ・サイクルと空間のイメージ構成に関する研究 第5報一、日本建築学会計画系論文報告集、第435号、pp.127-136、1992.5
- vi) 坂戸省三：トルコ人と日本人の箱庭制作実験事例に現れた空間的特徴の比較考察 一 空間イメージの文化的差異に関する心理・社会的分析 その1一、日本建築学会計画系論文集、第520号、p.334、1999.6
- vii) 坂戸省三：箱庭制作実験事例に現れた空間構成における日本人的特徴と大陸的特徴の比較考察 一 空間イメージの文化的差異に関する心理・社会的分析 その2一、日本建築学会計画系論文集、第532号、pp.275-282、2000.6
- viii) 坂戸省三：空間構成におけるいわゆる日本人的特徴の心理的背景について 一 空間イメージの文化的差異に関する心理・社会的分析 その3一、日本建築学会計画系論文集、第552号、pp.335-342、2002.2
- ix) 坂戸省三：女性の箱庭作品において人類共通に見られる空間イメージとその特徴について、日本建築学会計画系論文集、第560号、pp.297-304、2002.10
- x) 坂戸省三：大陸文化圏男子被験者の箱庭作品に共通して現れる空間的特徴と彼らの世界像について 一 空間イメージの文化的差異に関する心理・社会的分析 その4一、日本建築学会計画系論文集、第572号、pp.185-192、2003.10

参考文献

- 1) エリクソン、E.H.、近藤邦夫訳：玩具と理性一経験の儀式化の諸段階一、みすず書房、p.42、1981
- 2) エリクソン、E.H.、仁科弥生訳：幼児期と社会、みすず書房、1977
- 3) 岡崎甚幸、柳沢和彦、難波恵美：居住空間構成法と幼稚園児、日本建築学会計画系論文集、第518号、pp.313-320、1999.4
- 4) 岡崎甚幸、大井史江、山口直子、浦崎寿輝：居住空間構成法と知的障害児、日本建築学会計画系論文集、第496号、pp.237-245、1997.6

注

- 注1) 実験は、2011年5月から7月に5歳児組を対象に、翌2012年4月から6月に4歳児組を対象に行った。実験担当は、河内が4歳児組男子⑦、⑩、4歳児組女子①、⑦、⑨、⑫、⑮の計7名、その他の学生が5歳児組男子⑤、5歳児組女子①、②、③、⑥の計5名をおこない（丸数字は表1の事例番号）、それ以外の39名は坂戸が行った。表1は以上の作例。5歳児組に関しては2012年にも河内が実験しているが、本稿では坂戸が多数の実験をした2011年の5歳児組を主な論述の対象とする。その他2011年3月末に卒園間際の園児を対象とした実験や、河内による2回目の実験、ブラジルでの実験などをおこなっている。
- 注2) 岡田康信（京都大学名誉教授、前日本箱庭療法学会理事長）が天理大学在職中におこなった箱庭の資料。幼稚園児から高校生までの実験は1974～1976年、大学生に対しては1977～1982年におこなわれた。
- 注3) 本稿で示した男女の空間的傾向のうち、男子の移動・侵入的、外部的、女子の内部的、内包的という特徴は、エリクソンが少年少女を対象とした玩具類で場面を作らせる実験において、性器的様式と関連させて論じている（参考文献2、pp.117-128）。その他の多元的、一元的、住人的などの特徴のとらえ方は筆者自身の箱庭観察によるものである。
- 注4) 岡崎らは参考文献3で「場」、参考文献4で「領域」を使用している。
- 注5) 男4⑦は写真25女4⑩と似た四隅にL字型の壁を建てる構成だったが、彼の作品は中央に神社が置かれており、写真20男5⑮のような「中心と四隅」という配置の求心的形式の男性的一元性のイメージと見ることが

- でき、女子の作品に見られる囲いとは異なると考えられる。
- 注6) こうした触覚的なものは箱庭療法では重要視されており、箱内に砂が用いられている理由の一つとなっている。その理由とは砂を触ることが創造のための進行を促すことである。今回の実験でその意味の一端が明らかになった。つまり砂遊びなどの触覚的遊びは、箱庭作成の原初的段階で頻繁に現れることからわかるように、人間の創造的行為の根本にある要素の一つで、それが解発されることにより、その後の創造的行為が点火されるのである。事実、5歳児組でも初め何をしていいかわからず、砂をいじったりするが、そのうちにリラックスしてきて、いろいろな遊びが始まるといった例が存在した（事例女5②や事例男5⑨など）。
- 注7) 女子の場合は、構造化された作品の全てが女性的一元性のイメージを中心とするものであったが、そこでは家族の生活などがイメージされ、あるいは演じられた。写真21女5⑨ではお父さんが飛行機（右上）で出張する場面などが演じられた。
- 注8) 5歳児組を対象とした箱庭実験は2011、2012年に行っている。前者は坂戸が行ったものが多く、後者は河内一人で行った。2011年の実験では単調な羅列か、余計なもののないすっきりした構造化の例が多く、中間的なものは少なかった。一方2012年の事例は中間的なものが多く、混沌でも4歳児組のものと違って場の空間が多数ある作例や、構造化でも混沌的傾向の強いもの（場的な隙間が多いものなど）が多かった。写真41はそうした中間段階の考察のために提示した2012年の作例である。
- 注9) 既発表論文vで箱庭に現れる男女の基本的イメージが生物学的由来をもっていること、また人類始原の姿をとどめていたといわれる狩猟採集民ブッシュマンの男女それぞれの生活空間と多くの側面で重なることを示した。女性的一元性のイメージはブッシュマン女性の生活空間のみならず、広く哺乳類の雌に見られる集団（群れ）内部的な行動様式のイメージと重なる。多元性のイメージはキャンプの外に広がる男性の狩猟の空間と重なる（様々な領域と、移動する主体、また客体としての動物たち）。また箱庭に明瞭に現れているように、小さな子供は一般に動物に興味をもつが、それは自らの生息環境を学習するために進化してきた心理生物学的メカニズムによると考えられる。
- 注10) 世界像遊びに関しては、既発表論文i、p.86、既発表論文iii、p.114、既発表論文iv、p.116
- 注11) なお羅列段階の既存玩具をずらす程度の操作と構造化段階の空間的な操作（「再配置、吟味」と「空間設置」）との中間的段階のものとして項目11の「単純移動」で示す次のような操作が現れる。例えば内容が移り変わっていく変転の場合、原初的な内容の場合でも、場面の移り変わりに従い、既にある玩具を撤去したり、移動させたりする。またもう一段進んだ段階では、例えば不要な物を撤去したり、置いてあったディーゼル車を移動して、そこに駅を置くといった操作が現れる。それは空間の関係以前の物と物の関係の段階といえる。
表1に関しては、「単純移動」の段階にも「他をずらす」操作は現れ、構造化の段階にも「他をずらす」、「単純移動」は現れるが、表では一番高い段階として現れたものを○で表示している。
- 注12) 女性的一元性のイメージが女性的原型のイメージであることは既発表論文ix参照。男性的一元性のイメージは多元性のイメージがより自己主張的な方向へ変形したものと考えられる。ヨーロッパを初め大陸の諸文明の男子においては男性的一元性のイメージが彼らの世界内存在の様態を表していることを既発表論文xで論じたが、幼児におけるその出現の兆しに関しては、ブラジルの子供たちの箱庭作品の考察を通して別稿で論じる予定である。
- 注13) 岡崎らが知的障害児に対しておこなった居住空間構成法の作品群を見ると、本稿で羅列に分類した作例に類似したものが大半である印象をうける。これは演じる遊び、そして世界像遊びが発達しなかったことによると考えることができよう。参考文献4。
- 注14) 羅列の段階では、並べられた物体の視覚的効果により、さらに並べ立てようとする欲求が惹起され、場的な空間の増加の段階では、並べられた玩具間に空間を見いだすことで、さらにいくつもの場の隙間を見いだしていく。このように、とりあえず何かをすることでさらにやりたいことを発見していく、つまり結果のフィードバックにより、さらに先に進めていくというパターンは、以降、遊びや学習その他の行動における基本的パターンとして存続し続ける。
- 注15) 岡崎らは羅列段階で現れている諸特徴に関して、「機械的で均質、そして幾何学的な空間構成が、現代的建築や伝統的な宗教建築などの空間と類似することも多い」と述べている。参考文献3、p.319

RESEARCH ON HUMAN INVENTIVENESS ORIGINS THROUGH KINDERGARTEN CHILDREN'S SANDPLAY WORKS

Shozo SAKATO *, *Ayu KAWAUCHI* ** and *Adriana HIGASHINO* ***

* Prof., Dept. of Architecture, National Institute of Technology, Akashi College, Japan, Dr.Eng.

** Grad. Stud., Graduate School of Humanity and Science, Ochanomizu Univ.

*** Assoc. Prof., Dept. of Architecture, National Institute of Technology, Akashi College, Japan, Dr.Eng.

This study utilizes sandplay experiments as a means to analyze the development of 4 and 5 year old kindergarten children's creative spatial organization of toys. The children were asked to arrange several toys in a box filled with sand, and they were told to play in the sand box and with the toys freely.

Fifty-one children, 25 boys and 26 girls between 4 and 5 years old, participated in the sandplay experiments. By analyzing the displacement of the toys in the box, the researchers were able to identify and classify the children's developmental steps in the creation and recognition of their spatial organization of the toys ranging from simple toy arrangements to more complex ones. "Enumeration" was the simplest example of toy arrangement, where the children enjoyed placing the toys in the box one after the other, and they did not establish any meaningful relationship between the toys. Some children placed the toys in a disorderly fashion, while others placed the toys in rows. When the toys were arranged in rows, they showed an emphasis in a certain direction. As an example, some children had all the toys facing right, other children made rows of toys parallel to the box sides. The "chaotic" classification is another example of a simple toy arrangement, where the children randomly and sometimes unstoppably stuffed toys in the box. Consequently, this resulted in a box that was completely packed with toys.

The toy arrangement classified as "structured arrangement" refers to examples where the children gave meaning and a clear spatial relationship to the toys and how the toys were displayed in the box. Two archetypical spatial images were identified in those structured arrangements. Boys had a tendency to show what is described hereafter as "spatial plurality," while girls, in contrast, presented a different tendency toward "female spatial singularity."

Spatial plurality appeared when the toys were arranged in a way that incorporated motion (cars, trains, boats) or intrusion and expanding spaces outside of the box. On the other hand, female spatial singularity was seen when the toys were arranged in an enclosed area; and, the relationship between the toys was one of inclusion, and the toys were restrained to the box. The girls placed the toys in a manner that created these internal spaces. For example, they used furniture toys and simulated the inside of a house, or they used toy figures of people and animals to suggest that they were living happily together.

These archetypical spatial images have already been identified in former sandplay experiments with older subjects. In this study with kindergarten age children the differences between boys and girls spatial images were identified in all of the structured arrangements. However, in the experiments herein, structured arrangements were fewer than the enumeration or chaotic arrangements. Some children showed the characteristics of spatial plurality or female spatial singularity, when they started placing the toys; but, at the end, they finished by filling all of the empty spaces with toys. Other children would place the toys in rows; but, in a corner of the box, they would place a table and a chair or a hospital and an ambulance, showing a start on giving meaning and spatial relationships to the toys.

These examples of arrangements between simple and structured showed the first steps towards spatial recognition. The children's intellectual capacity for recognizing and interacting with spatial organization appears in the form of this structural arrangement schema – spatial plurality or female spatial singularity.

(2015年8月27日原稿受理, 2016年2月15日採用決定)